

21年間の報告結果からみる衛生害虫の動向

◎石川 敬¹⁾
株式会社ビー・エム・エル 細菌検査課 寄生虫検査室¹⁾

【はじめに】

外部寄生虫感染症において蚊やマダニは、重篤な感染症を媒介する衛生害虫として注意が必要である。しかし、本邦での衛生害虫の発生動向の報告は乏しく、患者数の実態は明らかではない。そこで、当社の検査室における2000年-2020年までの21年間の検査結果を集計し、報告する。

【対象・方法】

当社の検査室で保管している過去21年間（2000年-2020年）のヒゼンダニ、マダニ、アタマジラミ、ケジラミ、トコジラミの検査結果を性別、年齢別（2012年-2020年）、年度別、都道府県別に集計した。

【結果】

21年間で報告した衛生害虫の総数は4,087件であり、内訳はヒゼンダニ2,911件、マダニ261件、アタマジラミ806件、ケジラミ103件、トコジラミ6件であった。患者の性差はヒゼンダニ、アタマジラミ、マダニは女性が多く、ケジラミとトコジラミは男性が多かった。年齢別ではヒゼンダニは81-90歳、マダニは61-70歳、アタマジラミは0-

10歳、ケジラミは31-40歳および71-80歳で患者数が多かった。年度別ではヒゼンダニは2006年、マダニは2013年、アタマジラミ、ケジラミ、トコジラミはそれぞれ2014年、2002年、2019年で患者数が最多であった。各都道府県において10万人あたりの患者数でみるとヒゼンダニ、マダニは郊外で患者数が多かった。

【考察】

ヒゼンダニにおいて20-40歳での感染を認めたことから、これらの患者は疥癬患者の介抱をした際に接触感染した可能性が考えられる。アタマジラミにおいて60歳以上の感染例も散見されたことから、今後は介護現場などにおいても対策をとる必要がある。

【まとめ】

今回の結果より、本邦では衛生害虫による患者が一定数存在しており、公衆衛生上重要であることが明らかとなった。特にヒゼンダニは接触感染で感染が拡大するため、医療および介護従事者における注意喚起が必要である。

連絡先: 049-232-3131